

令和七年度 一般入学試験（B日程）現代の国語・言語文化

徳山看護専門学校

受験番号	
氏名	
得点	

※ 解答はすべて解答用紙に記入してください。

問題一 次の文章を読んで問いに答えてください。

昭和三年四月四日、⑦農山漁村の名が全部あてはまるような、瀬戸内海せとなくまゐべりの一寒村へ、若い女の先生が赴任ふにんしてきた。百戸あまりの小さなその村は、入り江の海を湖のような形にみせる役をしている細長い岬みさきの、そのとつばなにあったので、対岸の町や村へゆくには小舟で渡わたったり、うねうねとまがりながらつづく岬の山道をしてく歩く歩いたりせねばならない。交通がすぐくふべんなので、小学校の生徒は四年までが村の分教場にゆき、五年になってはじめて、片道五キロの本村の小学校へかようのである。分教場の先生は二人で、うんと年寄りの男先生と、子どものように若い女先生がくるのにきまっていた。それはまるで、そういう規則があるかのように、大昔からそうだった。

壺井栄つばいさかえさんの小説「二十四の瞳」はこのように始まる。そして、一気に、読者を小説の①しゅだいに引き込んでゆく。まず、昭和三年と時代がはっきりと示され、戦争への足音が聞こえ始めてくる。だが、物語の舞台がどこなのか固有名詞で示されていない。これは、小説の最後までそのようなのだ。ここに、作者の強い意志を感じる。

物語は、だれもが①寸暇を惜しんで働き、だれもが働くことをいとわない岬の村の分教場から始まる。

新米の女（おなご）先生。大石久子先生が教室で新一年生を迎え、一人一人に声をかけてゆく。

「あなたミサ子さん。ミサちゃんというんでしょ。」「ううん。ミイさん、いうん。」「あら、ミイさんいうの。かわいらしいのね。」

こんな調子だ。磯吉、竹一、吉次、仁太、正の五人の男の子。松江、ミサ子、マスノ、富士子、早苗、小ツル、コトエの七人の女の子。子供たちはすぐに先生になつた。よく一緒に歌った。十二人。二十四の瞳である。

「この眸を、どうしてにごしてよいものか!」

ちっちゃいから小石先生とあだ名を付けられた大石先生は、洋服姿で、村の人が見たこともないようなピカピカの自転車に乗り、さっそうと片道八キロを通う。一学期が過ぎ、子供たちに会えない夏休みが終わわり、待ちわびていた二学期の最初の日、村を②襲った台風の後片付けを子供たちと一緒に手伝っていた先生が、足に大けがをしてしまった。

そして、いつまでたっても先生は学校に出てこない。会いたくてたまらない十二人の一年生は、とうとう土曜日の午後、みんなで八キロ先の一本松の先生の自宅を目指して歩き始める。叱られるから家族には黙って。

「おなご先生、びっくりするぞ。」「おう、よろこぶぞ。」

しかし、なにしろ片道八キロである。十二人はあまりの遠さに、最後には半べそをかきながらやっと一本松の先生の家にたどり着いた。

「せんせ、足まだ痛いん？せんせの、顔見に来たん。遠かったなあ。」「一本松がなかなか来んでコトやんが泣きだしたところじゃった。」

子供たちは、キツネうどんをごちそうになり、一本松の下に集まって③松葉杖の大石先生を囲んで人生初めてとなる記念写真を撮り、今度は船で対岸の岬の村に送ってもらう。この事件以来、子供から慕われる大石先生は、子供たちだけでなく村の人々にとっても大切な先生になり、先生はいつ学校に帰ってくるのか、大人も子供も心待ちにしている。しかし、足のケガがなかなか治らない大石先生が復帰したのは、校長先生の②はいりよにより、先生の自宅に近い本校だった。こうして十二人の子供たちは五年生になるまで大石先生とお別れすることになった。

四年後。本校で十二人を待っていた大石先生と、大人に少し近づいていく子供たちは、いよいよ一人一人心を深く結び合ってゆく。しかし、戦争の足音は確実に近付いてくる。男の子は時勢の影響を受け軍人を志すようになる。それは先生が深く悲しむことだったが、世の中が皆そちらを向かなければならない時代だった。村の暮らしはますます貧しく、子供たちも時代の波に翻弄され始める。

松江の母親が弟を出産後急に亡くなった。その松江が、突然どこかに連れていかれたらしい。隣家の小ツルが言う。

「マツちゃん、ゆうべの船で、大阪へいったん。しんるいの家へ、子にいったん。マツちゃん、行かんいうておいおい泣いて。庭の口の柱にかえついで泣いたん。みんなもらい泣きしよった。私も涙が出てきて弱った。」

旧家に育った富士子は、家の④没落のため一家そろって村を出て行方知らずとなった。

磯吉は六年生を卒業後、すぐに大阪に働きに出た。

「せんせ、ながながお世話になりました。そんなら、ごきげんよろしゅ。」

そう言った顔が忘れられない。真新しい鳥打帽がよく似合っていた。コトエも同じように家計を助けるために都会に働きに出て行った。そのうち、村に帰ってお母さんのような普通の結婚をするのだと。

やがて、戦争は激しさを増し男の子はみんな戦地に送られた。船員だった先生の夫は戦死し、先生のまだ幼い長女は、お腹がすいて③がまんでぎずに青い柿を食べ、一夜で死んだ。先生はどうとう学校をやめてしまった。

あれから十八年。戦争が終わり、貧しいけれども平和が戻って来たとき、④かみに白いものが交じり始めた大石先生は、また四月四日に分教場のおなご先生になった。立派に成人し、本校の先生になった教え子の早苗に勧められたのだ。おなご先生は、四十歳になっていた。

入学式の日、先生は新一年生の名前を呼んでいく。

「あら、あなた。コトエさんの家の子?」「?」

歳の離れたコトエの妹は姉のことを知らなかった。

「あなた、松江ちゃんはお姉さん?」

「ううん。お母さん。大阪におるん。洋服を送ってくれたん。」

A、物語は最後の場面を迎える。大石先生がまた岬の村の分教場に帰ってきたことを喜び、かつての教え子たちが歓迎会を開いてくれたのだ。会場は海が見えるマスノの経営する料理屋「水月楼」。案内状は早苗の文字だった。出席者は磯吉に吉次。松江、小ツル、ミサ子、早苗、マスノの七人。仁太、竹一、正は、村の丘の上にある兵隊墓の中にいる。大阪に働きに出て結核を患い、村に帰って物置の片隅でひっそり死んでいたコトエの小さな墓もすぐ近くにある。行年二十二歳。富士子の行方は知れない。

「せんせ、わたし、松江です。」
会場に入ると、いきな着物を着た松江がしがみついできて、泣いた。
宴が進み、床の間に置いてあった、あの一年生のとき撮った一本松の写真が、吉次から磯吉に渡る。戦争で5りょうがんを失った磯吉はそれを手にもち、指さしながら言う。

「真ん中のこれが松葉杖をついた先生。その前にぼくと竹一と仁太が並んで。ここにマアちゃん。こつちが富士子。マツちゃんが・・・。」
だが、その指はだんだんそれていく。あいつちの打てなくなった吉次が変わって、大石先生がこたえる。
「そう、そう、そうだわ、そうだ。」

明るい声でいきをあわせている先生の頬を、涙の線が走った。早苗がつと立ち上がった。マスノが、六年生るとき歌った「荒城の月」を窓辺の手すりに寄りかかり、海を見ながらひとり歌い始める。早苗が、いきなりマスノの背にしがみついでむせび泣いた。

「人は何のために子を産み、愛し、育てるのだろうか。」

こうして物語は終わっていくが、なぜか子供たちの方言が生き生きと心に残ってやまない。やはり、5不朽の名作である。

(壺井栄「二十四の瞳」講談社 による)

問1 問題文中①～⑤の傍線部は読みを、①～⑤の二重傍線部は漢字を書いてください。

問2 問題文中 A には接続詞が入ります。適切な接続詞を書き入れてください。

問3 作者は、この小説の舞台を「ア農山漁村の名が全部あてはまるような、イ瀬戸内海べりの一寒村」とだけ書いて具体的な地名を書いていません。小説のどこにも書いていないのです。なぜだと思いませんか。寒村とは貧しい村のことです。

問4 この小説では、会話が生き生きと方言で書かれています。あなたの胸を打った方言を書き出してください。

問5 この小説に込められた作者の強い思いを問題文中から探し出し書いてください。

問題二 次の慣用表現を使って、主語述語を置いて短文を作ってください。

- ① 一糸乱れず ② 襟を正す

問題三 次の文の傍線部の敬語の種類を選んでください。

- ① 私が申し上げます。 【 】
② あの方がおいでになります。 【 】
③ お茶をどうぞ。 【 】
④ その係は私です。 【 】
⑤ 昨日お目にかかった者です。 【 】

ア 尊敬語 イ 丁寧語 ウ 美化語 エ 謙讓語

問題四 次の短歌は佐藤弓生の作品です。いろいろな情景が想像できそうですね。空想もいいでしょう。自由に発想し、浮かんできた情景を一〇〇字程度で書いてください。書き方も自由です。また、そのあなたの文章に題名を付けてください。

靴ひもをほどけば星がこぼれだすどれほどあるきつづけたあなた